

メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 —マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける奇跡を材料として(1)—

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico
— with Reference to Miracle Works in a Maya Yucatecan Catholic Community,Mani(1) —

中別府 温和

小論の目的は、マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける宗教文化統合のあり方を、奇跡という視点から解明することである。

宗教的文化統合は仮説的概念である。「宗教が文化の中心に位置していて、その文化のある部分を濃く、ある部分を弱く色づけている」と仮説的に考えて、社会を調査し分析していくために作成されている。この仮説に立つことによって、宗教現象の諸特性を時間感覚、空間感覚、心的過程、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、宗教現象の科学的解明を試みる。

本稿では、宗教現象の一つである奇跡を、調査地マニの人々の病気治療という視点から聴取調査し、そこに信仰がどのように関わっているかを分析した。その結果、マニにおいては、聖像への誓願の違犯が病気を引き起こす重要な要因であり、罹患した病気からの快復もまた聖像によって実現されることの一側面が明らかになった。特に、聖母(ヴィルヘン)とニーニョ・ディオス(幼な子イエス像)は病因としても、また、病気治療の手段としても、最も重要な位置をしめており、このことへの社会的信頼が聖母崇拜とニーニョ・ディオスをめぐる祝祭を継承させていることを解明した。

キーワード：カトリック的宗教文化統合、マヤ、教会、聖像、奇跡

目次

はじめに—カトリック的宗教文化統合の一側面—

1 初期キリスト教社会と病気治療

2 マヤの伝統医療

I 教会と聖像と病気

1 聖像—聖像への誓願の違犯に対する懲罰 (*castigo*) としての病気—

2 聖像のための祝祭

3 誓願の違犯

II 聖像と病氣治療

1 聖母

2 幼子イエス (Niño Dios ニーニョ・ディオス)

おわりに

はじめに—カトリック的宗教文化統合の一側面—

1 初期キリスト教社会と病氣治療

太古から、信仰は病氣治療と乖離しがたい連関を保ってきた。初期のキリスト教社会でも、H. E. シゲリスト¹ や山形孝夫² が指摘するように、医療は信仰による病氣治療であった。福音書は、イエスとイエスの弟子たちによる癒しの奇跡の記事を、悪霊憑き、盲人、癩病人、足や耳の慢性的麻痺や疾患などに関して記録している。これらの記事には、死者の蘇生も含まれる³。

イエスの生きた時代の有力な病因は神罰であった。死や病氣は、人間が犯した罪への神罰と解釈された。したがって、病氣と患者に対して厳格なタブーや制裁が加えられる一方で、治療行為全体は最高法院をとおして、祭司の手に全面的に委任されていた。法的には、祭司の職能が魔術師や呪術師のそれと厳密に区別されていたので、イエスとその弟子たちによる病氣治療行為自体は、事実上はタブーの侵犯であり、ユダヤ最高の法体系に対する「無謀な挑戦」であった⁴。

イエスは、手、唾、特に命令形の言葉を手段として奇跡の治療を行った、とシゲリストは書いている⁵。山形は、治癒神イエスに遊行的性格を与えている⁶。遊行する治癒神イエスによる癒しの奇跡は、神力の実証として最も強力であり、治療は信仰告白や異教徒の改宗を伴った、とシゲリストは言う⁷。

イエスの弟子たちも、病氣治療を行った。弟子たちは、「イエスの名において」、病氣を癒した⁸。弟子たちの派遣に際しては、宣教と病氣治療が使命として与えられた(マタイ10・1-2、同10・7-8；マルコ3・14-15、同6：12-13；ルカ9・1-2など)⁹。

キリスト教社会は、伝染病を神罰、心の病に関連する事象の一部を悪魔憑きとする病因論の伝統の中で、ヴィルヘン・マリアと聖人を媒介とする病氣治療を発展させてきた。人が病氣に罹った時、ヴィルヘン・マリアには、「病人の医師」、「病いの医師」、「病氣の治療」、「病人の薬」、「われらの傷の薬」、「病氣の速やかな治療」、「あらゆる苦しみの終わり」、「われらの治療」、などの呼称が与えられてきた¹⁰。また、フランスでは、ヴィルヘンの治癒能力に対して、「ルルドのノートルダム」をはじめ、「病人のノートルダム」、「虚弱者のノートルダム」、「患いのノートルダム」、「救済のノートルダム」、「治癒のノートルダム」、「回復のノートルダム」、「健康のノートルダム」など約

40の教会が捧げられている¹¹。ヴィルヘンに捧げられた諸教会は人々の巡礼の空間も構成してきた。

聖人も奇跡を行った。聖人たちの間で病氣治療の分業が起こり、特定の疾病に対して治癒力を発現する聖人も存在した。聖人の治癒能力への信仰は、聖人の埋葬地、聖遺物、聖像に対しても保持されるようになった¹²。

キリスト教社会、特に初期キリスト教社会においては、上述のような思考様式が病因と治療に関して存在した。こうしたキリスト教社会に伝統的な病因と治療は、マヤ・ユカテカのカトリック村落マニにおいても具体的な形で厳存している。

2 マヤの伝統医療

地図1 現在のマニ (メキシコユカタン州マニ)

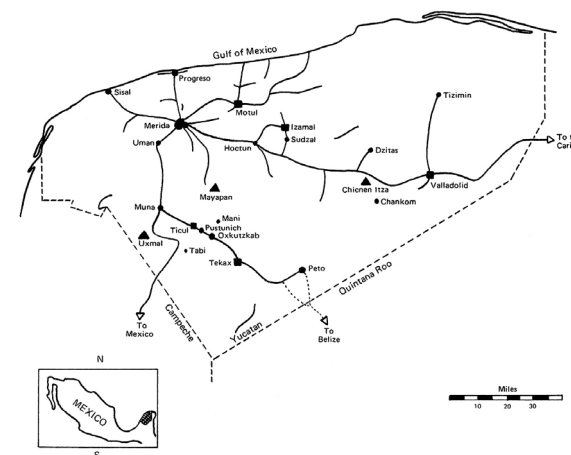
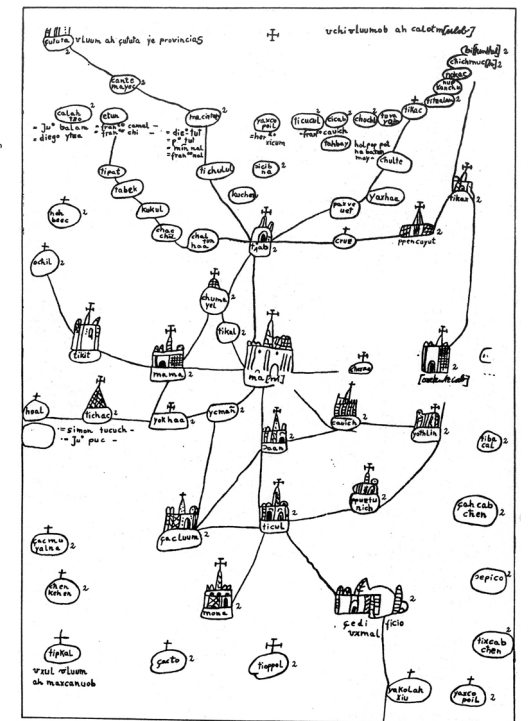


図1 16世紀中葉のマニおよびその周辺村落



マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニ (Mani 地図 1参照)¹³ およびその周辺村落におけるカトリック教会の分布は、16世紀の中葉は図1のような姿であった。図中の中心に位置しているマニは、シュー (Xiu) の都であった。1548年、カトリック教会の神父による布教が開始されている。マニにおいて、人々が奇跡的な事柄として解釈する内容はメン (Men 呪医=祭司)¹⁴ に関わるも

のと、神と聖像に関わるものからなっている。メンは、マニはその周辺村落において、病気を治療しようと同時に、伝統的な儀礼を行うことができる唯一の存在である。

メンをとおして語られる奇跡的な事柄は、病気治療とエチソ(邪術 *hechizo*)¹⁵に最も深く関連する。メンは祈り¹⁶と治療によって、腹痛、頭痛、歯痛、下痢、緑の便、嘔吐、痒み、アルコール依存症、夜泣きを治癒する。メンの治療行為の評価を特別に高めている事実は邪眼である。邪眼は妊婦、外で働いてかえってきたばかりの男、酔っぱらいなどとの接触によって引き起こされるのでその事例はマニで頻出する。邪眼はメンだけが診断と治療ができるとされていて、医者はそのを治せない信じられている。

メンは人間だけでなく家禽類や家畜の不調も治すことができる。マニの人々は各自の敷地内に鶏、七面鳥、豚、牛などを飼って、自分の食用にあるいは医療代の補助に供している。それらが病気になったり死んだりするときの相談は、メンに向けられる。家禽類や家畜の不調や死の原因は、メンによると、土地や畑や家が病気(*kojan*)であるからと解釈される場合が多い。土地や畑や家の病気は、そこに関係する人や動物を不調にし、死に至らせ、そこでの生産活動を不振に陥らせる。メンはそうした耕作地や居住空間の病気を治し、人々や動物を望ましい状態に立ち直らせることができる人々に信じられている。

人々や家畜や田畑などの病気の原因は、メンによって、「悪い風(*kakas ik*)」に帰せられることが多い。メンが説明として示す病因は、*chuca'an men ik*(風につかまえられる)、*chuc men yikal ch'en*(井戸の風につかまえられる)、*chuc men yikal ja'*(降雨直前の風につかまえられる)、*chuc men yikal col*(とうもろこし畑の風につかまえられる)、*chuc men yikal sahadab*(洞窟の風につかまえられる)、*chuc men yikal actun*(水の出る洞窟の風につかまえられる)、*chuc men yikal bej*(道の風につかまえられる)、*chuc men yuntzil*(風につかまえられる)、*chuc men yumil ka'ax*(山の神につかまえられる)、*ya'ax ich che'*(果樹の初物を神ユンツィルに捧げない)、*ch'ach'ac*(雨の神チャックに食べ物を捧げない)、*man kakas chi'ich yokol*(悪い鳥が屋根の上を横切る)のどれか、あるいはそれらの複合の場合が通例であるが、ここでは風が重要な位置を占めている。

メンは病因としての「悪い風」を看破することができ、それを取り除くことができる唯一の存在である。メンが「悪い風」に対処する手段は、祈りと二三の物的手段、例えば、洞察用のガラス玉と処方用の薬草類などである。祈りはマヤ語で誦せられ、マニの人々はその意味は分からないし、知ろうともしない。この祈りの中で、メンは12の風と32の神的な存在を喚び起こし、祭壇に迎え入れ、供物を捧げ、最後にはそれらの存在を送り返す。この儀礼はメンだけが行うことができ、マニの一般の人々はメンのその力を信頼する。メンは薬草の処方に精通していて、治療中にどのような薬で対処するかを感知し、山中に出かけそれらの原料を採集する。この薬草に関する大量の知識とそれらの多種多様な処方が人々を圧倒する。一人のメンは200種以上の薬草を熟知しているという。また、治療の最中に「死者となったメン」と声色を変えてやりとりをしたり、9回の治療を終了した時点で鶏を使って行われる象徴的行為(ケーシュ *kesu*と呼ばれる)などが、メンの神

秘性や呪術性を高めている。

メンは人々に頼まれてエチソ(邪術)をかけたり、エチソを解いたりする。メンに関わる病気治療38事例の中で、エチソは17事例を占めている。メンは病気を治す存在でもあるが、邪術を媒介にして人々を病気にする存在でもある。エチソは経済的成功や円満な家庭生活への嫉妬、人間関係から来る遺恨、男女関係にまつわるもつれ、財産相続の係争、エチソへの対抗手段などを契機としてかけられる。エチソは家族親族内でかけられる場合もあり、家族や親族を出た範囲でかけられる場合もある。さらに、邪術が効果をもった場合に結果する異常な出来事(例えば、動物や虫が人の行動を遮ったり邪魔したりする)、異常死(例えば、遺体に蛇やイグアナがいたり、柩の中から紐が出てきたりする)、ならびに邪術をかけるときと解くときにメンが使用する特異な手段(例えば、幼児で死んだ人の肋骨や墓の土や死者の履き物)などがメンの呪術性を強めている。邪術とともに、メンの発する予言もマニの人々にメンへの信頼を築かせている。メンの予言は病気治療の可能性や不可能性、近い将来の生活状況、結婚の形態、行方不明者や紛失物の発見、男女関係の成り行きや立て直し、アルコール依存症、出産、死など現実の生活の多様な局面に関係し、しかも数字、日時、時刻、方角、地点、動物、行動内容について細部にわたる明確な言及をする。その予言内容が依頼者の現実の生活の中で確認されていく中でメンの奇跡性は高められていく。

メンをとおして語られる奇跡的な出来事は、村境を越えて展開する一面ももっている。マニでメンをめぐる出来事を語る人の話の内容には、隣接する村落のメンの登場する場合がある。「他の村のメンの方が優れている」という人もいるし、人々は自分の村落のメンだけでなく他村落のメンに相談に行く。特に邪術の場合はその傾向が高くなる。マニはメンをとおしても他村落に対して開かれているのである。

メンをとおして語られる奇跡的な事柄には、女性の方がより多く関わっている。筆者の調査によって蒐集された38の事例は24名の女性から聴き取りされたものであるという事実そのものが、女性によるメンへのより深い関わり的一端を暗示しているであろう。さらに、38事例の中には、男性(夫や男性の親戚など)がメンに不信頼を示す場面が散見される。

教会との関連においては、教会内の諸聖像及び家庭祭壇の諸聖像が奇跡的事柄と関わる。ここでは、諸聖像をめぐる奇跡の事例の内容の分析を行い、メンをとおして語られる奇跡的な事柄と対比しながら考察を進めていく。

本稿では、上述のような研究結果を踏まえて、*milagro*(奇跡、霊験の意)という言葉が現実にはどのように理解されているか、*milagro*という言葉には具体的にはどのような内容が含まれているのかを具体的に考察することによって、カトリック村落マニにおける奇跡の側面に接近したい。

基本的資料は、「今までに最も奇跡的と受けとめた出来事は何ですか? (*¿ Que es la cosa más milagrosa en su vida ?*)」という質問への回答を聞き取りしたものである。この質問への応答の中で、自分自身の体験として語られて、かつ病気治療に関する内容を含む事例は、マニで111を数え

る。これらの111の事例は病因、治療手段の内容に関して、教会の神や聖像による病気治癒に関わるものと、メンによる病気治癒に関わるものとに大別できる。

ここでは、教会の神や聖像に関する73事例を基本的材料として取り扱う。

I 教会と聖像と病気

マニ村の中心 (*kiwic*) には、サン・ミゲル・アルカンヘルをパトロン (*patrón de Mani*)、ヴィルヘン・デ・アスンシオンをヴィルヘン (*Virgen de Mani*) とする大教会 (写真 1: 2: 参照) が聳え立っている。この教会の周囲が、サンホワン: サンティアゴ: サンホセ: サントルシア: カンデラリア: サンイシードロの6区 (*barrio*) に割られ、それぞれ小教会を所有している。サンイシードロとサンティアゴが5月、サンホセが7月、カンデラリアが2月に祝祭を行う。

写真1 マニの教会



写真2 マニの教会の内部



教会の聖像は、①サン・ペドロ、②サン・ミゲル・アルカンヘル、③サン・フランシスコ、④ヴィルヘン・マリア、⑤サン・アントニオ、⑥ヘスス・ナザレ、⑦ヴィルヘン・ドロローサ、⑧サン・ウダス、⑨ヴィルヘン・グアダルーペ、⑩ヴィルヘン・デ・アスンシオンである。

マニの人々の家内祭壇 (写真 3 4 5 6 参照) には、①三賢王、②サン・マルティン、③サン・ホセ、④ニーニョ・デ・アトーチャ、⑤ニーニョ・デ・ディオス、⑥ヴィルヘン・マリア、⑦コラソン・デ・ヘスス、⑧マリア・デ・サポパン、⑨ヴィルヘン・デ・アスンシオン、などである。

マニの人口約3140人中300~500人は、サバティスタ: ペンテコステ: モルモン: バプティスト: エホバの証人: 長老派を中心とするプロテスタントである。これらを除く人々はカトリックである。

写真3 マニの家内祭壇



写真4 クリスマス時期のマニの家内祭壇 (1)



写真5 クリスマス時期のマニの家内祭壇 (2)



写真6 クリスマス時期の教会の幼子イエス



1 聖像—聖像への誓願の違犯に対する懲罰 (*castigo*) としての病気—

マニのカトリック教会や家内祭壇の聖像は、それらへの信仰を抱く者の病気を懲罰し病気に陥れる存在である。聖像の懲罰としての病気は、まず、聖像への誓願 (*juramento: promesa*) の違犯に対する科罰として結果する。

事例1

ヴィルヘン・デ・アスンシオンには父が初穂のトウモロコシを必ず捧げます。初穂のなかで一番立派なのを、一番大きいトウモロコシを6本持っていきます。家では庭の木にチュウユ (*ch'uyu* マヤの伝統的な祭壇) を垂らしてサカップ (*sak'ap*)¹⁷ をします。

ヴィルヘンに誓願をしてそれを果たさないと病気になります。病気はヴィルヘンの懲罰のせい

です。ヴィルヘンの懲罰でなった病気のときは、医者のところに行っても「あなたは何の病気でもない」と言われます。そのようなときは、もう一度ヴィルヘンに頼みます。すると、よく夢をみます。「もう一度捧げ物 (*ofrenda*) をすると病気は治ります」と夢でヴィルヘンに言われます。そんなときはもう一度捧げ物をします。ヴィルヘンの懲罰でなった病気のときは、医者も薬も役に立ちません (*de nada*)。(51歳・男子・既婚)

ヴィルヘンの懲罰による病気の診断と治療の困難さが強調されている。ヴィルヘンによる病気は、ヴィルヘンに頼んで治してもらう他はない。「医者も薬も何の役にも立たない」教会でも家内祭壇でも、初穂をヴィルヘンに捧げる行為は一般的である。この家族は、初穂の供物に加えて、マヤ・ユカテカの儀礼の一つであるサカップをもヴィルヘンに捧げている。

「夢による語り告げ」も観察される。

事例2

私はとても貧しかった。7人の子供がいました。毎年マリアの家に行って、ニーニョ・ディオスに「カベサ・デ・コチーノ(後述)の祝祭に来て踊ります」と誓っていました (*juramento*)。子供たちが大きくなって、娘にも息子にも恋人ができました。私はチェトマルに行って雑貨品を売っておりました。そうするうちにだんだん金持ちになりました。15年くらいたってからニーニョに「もうカベサ・デ・コチーノの祝祭に来て踊るのを止めます」と言いました。するとマリア(ニーニョ・ディオスの持ち主)が「あなたがどう言おうとかまわないけれど、誓い (*juramento*) のことは忘れないようにしなさいよ」と言ったのです。それ以来、私はマリアの家には行きませんでした。

ところが或る日、私が広場に行ったときに階段を降りようとして転んで腰を怪我しました。そのとき私はニーニョへの誓いのことを思い出し、「ニーニョが私に懲罰を与えたのだ」と考えました。私はメリダに行って、傷の手当てをすませてからマリアの家に行きニーニョの前で新たな誓いをなしました。「ニーニョ、お許し下さい。今日ここで誓います。これから毎年カベサ・デ・コチーノの祝祭に来て踊ることを誓います。確かに懲罰はお受けいたしました。私の過ちを反省しています」と誓いました。それからずっとカベサ・デ・コチーノの祝祭にでかけて踊ることを欠かしたことはありません。(年令不祥・女子・既婚)

事例3

私は25年以上もニーニョへの二つの誓いを守ってきておりました。ところが、6年前に、私の息子の結婚式にマリア(ニーニョ・ディオスの持ち主)を招待したにもかかわらず彼女が来なかったので腹が立ち、マリアに「もうあなたの家には行きません。豚も殺しに行かないし、カベサ・デ・コチーノの祝祭で踊ることもしない」と言いました。するとマリアは「ニーニョへの二つの誓いの

ことを忘れないようにしなさいよ」と言いました。

そのことがあってから私は4年間マリアの家にはいきませんでした。そうすると私の家で病気が相次いでおこりました。ミルパの収穫ありませんでした。そのとき私はニーニョへの二つの誓いを思い出しましたので、マリアの家に行き「マリア、許してください。ニーニョ。お許し下さい。二つの誓いを守りませんでした、ただ今からそれらを果たしてまいります」とあらたに誓いました。それから2年間二つの誓いを守っていますが、私の家に病気ありませんし、ミルパも豊作です。(年令不祥・男子・既婚)

事例4

私はマリア(ニーニョ・ディオスの持ち主)の家のニーニョに二つの誓いをしていました。ひとつは「毎年カベサ・デ・コチーノの祝祭のために七面鳥を殺し、食物を用意します」という誓いであり、もう一つは「カベサ・デ・コチーノの祝祭で踊ります」という誓いでした。ところが、4年くらいたってこの二つの誓いを果たさなくなっておりました。

すると1月3日に棒を持ち上げたときに、それが足に落ちかかり怪我をしました。そのときにニーニョへの誓いのことを思い出しました。すぐに三輪車 (*triciclo*) に乗ってマリアの家のニーニョのところに行き「ニーニョ、お許しを乞いにまいりました。ここであらたに二つの誓いをなします」と誓って、それから毎年それらの二つの誓いを守りつづけています。祝祭の劇のところでは、男に扮する女の役をやってきましたが、今は歩けなくなったので娘のロレーナが代行しています。娘もニーニョの前で「母が歩けなくなりましたので、私が代わりにやります」と誓ったのです。(年令不祥・男子・既婚)

事例2・3・4は、ニーニョ・ディオス(幼きイエスの聖像)への誓願の違犯は、病気で必罰されることを示している。この3事例は、①誓願の不誠実な放棄→②ニーニョ・ディオスの持ち主(マリア)による警告→③負傷や病気の自己体験→④誓願の違犯の想起→⑤ニーニョ・ディオスの前での懺悔と誓願→⑥幸福な状態の再現、という構図を共有している。誓願を果たし続ける限り、幸福が約束されるという解釈と態度が存在する。

聖像は、誓願の違犯を病気で必罰するだけでなく、次の事例のように盗みやその他の不道徳へも懲罰としての病気を科す。

事例5

一人の男が私のパルセーラからトウガラシを盗んだので、ニーニョ・ディオスに盗んだ人に懲罰を与えてくださいと頼んだところ、その人は病気になりました。(51歳・女子・既婚)

事例6

祭壇の上のものを盗んだりすると、その持ち主が**マリアに頼めばマリアが懲罰 (*castigo*) を与えます**。アスンシオンの祭があったとき、みんながアスンシオンにお金を捧げるのですが、男二人が組んでそのお金を盗んだことがあります。一年間盗みつづけたのですが、**一年後の自分のミルパの収穫のときにミルパが全焼しました**。もう一人の男は盗みはじめて6ヵ月後に**稲光にうたれて両腕両脚に大怪我を負いました**。また、アスンシオンに豚を捧げますと、誓願 (*promesa*) していた人がそれを果たさなかった (*no cumplir*) ところ、**豚が死んでしまいました**。(19歳・男子・既婚)

また、ニーニョ・ディオスの影響は強大なので、人々に死をも招くと語られる。

事例7

私の両親がニーニョ・ディオスを持っている人の家に行き、ニーニョの祭壇の前に座っていました。すると、ニーニョが一度首を動かし、しばらくして、今度は反対方向に首を動かして微笑したのだそうです。私の両親はこれを目撃したのですが、母が「**ニーニョが首を動かしたのは、私が直に死ぬからに違いない**」と言い出したのです。「病気もしていないのだから、死ぬはずがない」と、私たちは励ましました。が、母は「**私は夢を見た。夢でニーニョが、あなたは死ぬと告げた**」と主張して聞きません。

そうするうちに、鳥がショーチ、ショーチと啼きながら、家の上を何度も往復したことがありました。これは不幸の兆候なのですが、母はこのことを取り上げて、「私は案の定死ぬんだ」と言い始めました。その後も、バナナの実のついている位置が異常であることや、犬がハーワー、ハーワーと啼くことに言及しては、「**ニーニョが夢で告げたように、私は間もなく死ぬ**」と言い張りしました。

私たちは病気だった父の方が先に死ぬだろうと考えておりましたが、母が翌年の2月に逝きました。(49歳・男子・既婚)

このように、マニのカトリック教会や家内祭壇の聖像は、それらへの信仰を抱く者を懲罰し、病気に陥れる存在である。聖像の懲罰としての病気は、まず、聖像への誓願 (*juramento:promesa*) の違犯に対する科罰として結果する。マニでは、ヴィルヘンの懲罰による病気の診断と治療は非常に困難であることが強調されている。ヴィルヘンによる病気は、ヴィルヘンに頼んで治してもらう他はない。医者も薬も何の役にも立たない場合が多い。

さらに、聖像は誓願の違犯を病気で必罰するだけでなく、盗みやその他の不道徳へも懲罰としての病気を科す。聖像の科罰は、病気だけでなく、場合によっては本人の死さえも招来することがある。

そうした聖像の懲罰を自分がこうむらないようにと、また不道徳を行う誰かに聖像の懲罰が及ぶようにと、教会でも家内祭壇でも、初穂をヴィルヘンに捧げる行為は一般的である。

特に、事例2・3・4は、ニーニョ・ディオス(幼きイエスの聖像)への誓願の違犯は、病気で必罰されることを示している。この3事例は、①ニーニョ・ディオスへの誓願の不誠実な放棄→②ニーニョ・ディオスの持ち主(マリア)による警告→③負傷や病気の自己体験→④誓願の違犯の想起→⑤ニーニョ・ディオスの前での懺悔と新たな誓願→⑥幸福な状態の再現、という構図を共有している。マニの人々の間には、聖像への誓願を果たし続ける限り、幸福が約束されるという解釈と態度が存在する。

2 聖像のための祝祭

聖像の懲罰(*castigo*)としての病気において問題とした事例2・3・4は、聖像のための祝祭が、誓願の違犯への懲罰としての病気という思考との関連でも理解されねばならないことを示している。聖像の奇跡の治癒力を信じるカトリックの人々が、供物を伴った聖像への誓願に違犯したことへの科罰は、病気を中心とする不幸不運であると信じる。聖像に対する二重の信仰が、聖像のための祝祭の存続を支持してきた。

このような視座からとらえられた聖像のための祝祭を、具体的に記述し、若干の考察を試みたい。ここで取り上げる事例は、カベサ・デ・コチーノ(*cabeza de cochino*「豚の頭」)と呼ばれる祝祭である。マニおよびその周辺村落で共有され、最も著名なものの一つである。

カベサ・デ・コチーノは、元来、カベサ・デ・ヴェナード(「鹿の頭」)であった。スペイン人の到来後、「鹿の頭」を「豚の頭」に替えたと言う。その経緯を歴史的に辿ることは現在ではできない。ここで言及するカベサ・デ・コチーノは、ニーニョ・ディオスのために行われるものだが、三賢王に捧げられるものもある。

この祝祭は、49年前に、キログという男がニーニョ・ディオスに誓願をして始めた。キログのニーニョの奇跡が絶大であるので、このニーニョに対する誓願の依頼者が激増し、ユカタンで最大のカベサ・デ・コチーノになってしまった。キログは、1972年、「自分の死後も祝祭を続けること」を遺言にして死んだ。それ以来、妻のマリアが祝祭を存続させてきた。

12月16日 カベサ・デ・コチーノは、家の土間に新しく祭壇が設けられ、マリアとホセの聖像が対置されることで始まる。12月24日まで、毎日、祈りと共同飲食が行われる。

12月24日 午前零時、ニーニョ・デ・ディオスが誕生する。マリアとホセの聖像の間に、ニーニョが置かれる。ニーニョに対して、供物と誓願が開始され、これは翌年1月1日まで毎日続く。

供物を捧げる人は、ろうそく、花、金銭、衣服、首飾り、指輪、鶏などを持参し、

祭壇に捧げた後、ニーニョを抱いて接吻する。誓願の希望者は非常に多いので、誰が何時するかは、ニーニョの持ち主のマリアが決定する。

誓願を許された者は、花、ローソクに加えてタコス、タマル、清涼飲料水、甘菓子などの食物をニーニョに捧げてから誓願をする。「ニーニョ、今年も、もう一度、祝祭 (fiesta) をお捧げいたします。どうぞ、その祝祭を恙なく果たすために、私に健康と幸運をお恵み下さいますように」、が誓願の内容である。

ニーニョは、12月25日から翌年1月1日まで、日に2～3度着替えをするが、ニーニョの着替えを行うことができるのは、誓願を行った者に限られている。

12月31日 午後2～3時頃に、テクアシュ (Tekax) の一婦人が、約100kgの豚を引っぱって来て、「この豚は、ニーニョ・ディオスのために捧げるものです」と言明する。

1月1日 朝3時に、それぞれボロンチェン (Bolonch'en) とカンペチェ (Campeche) 出身の二人の男が豚を殺す。首を刎ねて、口の中に石を一個入れる。

朝の6時と10時に、殺された豚を材料とした料理を共食する。

午後9時に、祭壇の前でニーニョに祈りを捧げた後、再び共同飲食する。

1月2日 朝4時、「豚の頭」が祭壇に捧げられる。朝8時、先述のボロンチェン出身の男が、「豚の頭」に紙や布切を使用して飾りつけを始める。装飾された「豚の頭」(*chacpol*) は、三つ作られる。婦人たち、娘たち、若者たちが三グループを構成し、別々に「豚の頭」を共有するのである。

朝10時、「豚の頭」を飾り付けた男が、豚の口の中に入れていた石を除いて、代わりにパンを入れる。共同飲食後、同日午後3時、アキル (Akil) 村から楽隊が到着、老若男女ハラナ (*Jarana*) を踊り始める。

午後5時、「豚の頭」が広場に運ばれる。一時間後に、「豚の頭の踊り」(*ok'osta pol*) が始まる。音楽に合わせて踊りながら、広場から7区画を経てニーニョ・ディオスの家に到着すると、入り口付近で次のような応酬が劇として行われる。子沢山で貧しいので金持ちの愛人を欲しがると、子沢山で貧しいので「豚の頭」の売却による高収入か金持ちの愛人の獲得をねらう女との応酬である。前者を、ニーニョの持ち主のマリアが演じ、後者は「豚の頭」の担ぎ手とその付添いたちである。

劇中のやりとりを全て記述しておきたい。マヤ語の台詞による応酬である。

Jach ca'nano'on

「(わたしたちは大変)疲れた。」

Beyxan le otsil k'ek'eno'oba'

「(そして、また、) かわいそうに、豚(たち)も疲れている。」

Cone, cone

「豚(たち)を売ってしまおう、豚(たち)を売ってしまおう。」

U tial wa cone le mejen k'ek'eno'oba'

「あんたたちは、子豚(たち)を売るといのかい。」

U tial, u tial

「そうだ、そうだ。」

Baxten tun, ca conicoob

「どうして子豚(たち)を売るんだい。」

Tumen mina'anto'on tak'in

「(なぜなら、わたしたちには) お金がないからよ。」

Ba'ax tial te'ex tak'in

「何(のため)に金が要るんだい。」

U tial in manic u nok'in palal

「(なぜなら、わたしの) 子どもたちに服を買ってやりたい。」

Lela' mina'an u pic,

「この娘は腰巻を持たんし、」

Lela' mina'an uyeex

「その娘は下穿きを持たん。」

Maas jadzuts beyo'

「(マヤの伝統的貫頭衣の裾をたくし上げながら)(腰巻や下穿きなんか着けずに) こうしている方がよっぽどましだ。」

Matic cu piquipicta'al tumen ik'

「(なぜなら) 風が足もとからスースー入ってきて(涼しいから)。」

Ma'atan, otsilo'ob mata wilic tso'ok u chan xlo'obayantalo'ob

「ちょっと、あれまあ、(ここに) 若い娘たちがいるのが見えないの。」

Jaja t'a'an laila,

「ハッハッ(と一笑して)、確かにそうだ。」

dzoc u p'ochol u chan iin

「この娘を(見て) ごらん、もう胸がふくらんできてるよ。」

Le olal in k'a'at in cone' mejen balcheoba

「だから、こ(れら)の生き物(=子豚)を売らなくては。」

Cone' man, cone', tene'

「母さん、売ってちょうだい、子豚を売ってちょうだい。」

Mina'an in' pix iin

「(私は) 胸当てを持ってないもの。」

Cone' man, cone', tene'

「母さん、売ってちょうだい、子豚を売ってちょうだい。」

Mina'an in' xana'

「(私は) 靴を持ってないもの。」

この場面で、娘たちはおのおのリボン、香水、手鏡、レボッソ（マヤの伝統衣ショール）、テルノ（マヤの伝統衣晴れ着）などを持っていないと訴える。

Chen ti tech kin in man wa ba'ax tu men teche' yan a novio

「お前だけに何か買ってやろう。だって、(お前には) ノビオ（恋人）がいるから。」

Yan wa a conkeex ten le k'ek'eno'obo wa ma'

「あんたたち、子豚（たち）を売るとかい売らないのかい。」

Yan, ba jux ka dza'ac

「売りますとも。さあいくら？」

Lela' jach dzoya'an

「この子豚は痩せっこけ。」

Bin u ca'aj kimil

「じきに死にそうだ。」

Le junlatula ma chucaan juntuul k'ek' ennili'

「その子豚は未熟もの。」

Mina'an u nej

「尾っぽもない。」

Le jela' jach ta k'as

「あの子豚は臭くて醜い。」

Si chen kuun in dzamatio'ob

「確かに、(わたしは子豚たちに) カボチャしかやってないから。」

Xule' teche' man k'ek'enen

「あなたは一流の豚買い商人だ。」

Wa matan k'ek'enech

「(あなたに) この子豚を献上しましょう。」

Conten, tene' man K'ek'enen

「(子豚たちをわたしに) 売ってもらいたい。(わたしは) 豚買い商人なんだから。」

Ya'ab tak'in kin in dzatech

「(わたしは) 金はどっさり払うから。」

Wa k'ate' \$150,000 tu oxtula

「(これらの子豚) 3頭に150,000ペソはどうです。」

Jach co'oj. Bajux u xul.

「そりゃあんまり高すぎる。最低ぎりぎりの値段は？」

Jach u xule' \$175,000

「最低ぎりぎりの値段は175,000ペソです。」

Dzoc u chocotal a pol

「とうとう頭が狂ったな。」

Baxten, jach ma u p'it tin wala

「どうして? (わたしが言ったのは) ほんのちょっぴり。」

Wa k'ate' \$ 75,000

「それじゃ、75,000ペソはどうです。」

Mas wa ya'ab \$ 75,000

「75,000ペソは175,000ペソより多いのかい？」

Mas ya'ab, jela

「そのとおり、さあ買った。」

Jelo', tele' k'ek'enoba, wa ma chuca'an le tak'ina' a ca'caj yetel jajaldios

「さあ、この子豚買った! 金をちゃんと払わないと、神様の罰があたるよ。」

喧噪と笑声の中で、豚をめぐっての商談は終わる。すると、誰かが「豚の頭」を頭上に置いて、入口から祭壇まで膝行する。運び手とマリアの間で授受の行われた「豚の頭」は、ニーニョ・ディオスの祭壇に向って右側手前におかれる。約1時間、参加者全員で祈りを捧げる。豚と鶏を材料としたタコスを共食した後、マリアから誰か一人がニーニョを預かり、胸に抱く。胸に抱かれたニーニョに随って、全員で再び広場へと行列を組む。この行列は歌だけを伴い、哀しみに満ちた厳粛なものでなければならないと言う。

ニーニョ・ディオスは、広場から7区画を経て、家に帰還する。マリアは膝を屈してニーニョを迎え、胸に抱く。マリアの胸に抱かれたニーニョに、全員が接吻を終えると、ニーニョは祭壇に置かれる。祈りが捧げられ、タコスが共食されると、マリアからルダと呼ばれる植物の枝葉が渡される。全ての人々が、ルダでニーニョを愛撫した後、ルダに接吻して帰る。

カベサ・デ・コチーノの祝祭は、次のような性質をそなえ持っている。

この祝祭は、ニーニョ・ディオスと三賢王のために行われるが、カトリック教会の祭司は、「あ

れは良くない、間違っている」と指摘する。

この祝祭の開催と存続を、実質的に支えている中心的人物は、ニーニョ・ディオスに誓願をした人々だけである。ニーニョ・ディオスを着替えさせるのも、「豚の頭」を頭上に負うのも、誓願をした人たちに限定される。

この祝祭を存続させてきた主体、および祝祭への参加者の大部分は女性である。祝祭の過程で展開される劇中の男性も、男装した女性が演じる。

この祝祭の過程での劇は、貧しい男女がそれぞれ金持ちの愛人を獲得しようとする努力のなかで、豚の売り買いのやりとりをするのがテーマであるが、劇の内容には、性的な因子が道化役の男を中心に色濃く表現されてくる。しかも、それらの性的な場面は、悪態、牴牾を媒介にした笑いの場面でもある。身体の部分への言及も、男が「臭いペニス」と表現されることなどにも表れているように、露骨で直截的である。また、卑猥な身振りや動作が随所に観察される。この点は、劇中の次のような掛合いにおいても顕著である。道化役と娘たちが掛け合っている。

「俺は、男の中の男だ。愛人が大勢欲しい。しかし、分限者の愛人でなくちゃだめだ。」

「ここにいるわよ。」(と、娘が言う)

「いやいや、だめだ。お前はだめだ。お前は貧しいし、不細工だ。俺は、別嬪で分限者の女が欲しいのだ。」

「私は分限者よ、私ならあなたとあなたの子供たちの面倒を見れるわよ。」(と、今度は別の娘が言う)

「確かにそうだ、気に入った。」

このような掛合いを繰り返しながら、道化役は娘たちに抱きついて卑猥な動作を行う。娘たちは次々に拒絶するが、マリアだけは、「私がここにいるよ、なんならやってもいいよ。」と言って応じるのである。

この祝祭は、財の消費を伴っている。マリアを例にとると、1977年まで、カベサ・デ・コチーノのために、30羽の七面鳥、豚3頭、飲物、トルティーヤを大量に消費し続けた。その結果、24Hの土地が5Hに、10kgの金はゼロに、2つの屋台が1つに、1軒の店も売却になった。財を消費し、財産は激減していくけれども、マリアは死ぬまで祝祭を続け、彼女の死後は、同居している姪の一人に引き継がせたいと考えている。

この祝祭を存続させてきた主要な人物は、ニーニョの持ち主マリア、豚を捧げる婦人、豚の屠殺と「豚の頭」の制作をする男であるが、マリアを除く他の3人は、それぞれテカシュ、カンペチュ、ボロンチェン出身の人々である。この祝祭は、何百kmも離れた村落間に、この種のコミュニケーションを成立させている。祝祭への参加者に関しても、同様のことが言える。

カベサ・デ・コチーノは、誓願と誓願をなしたカトリックの人々を核としながら存続してきて

いる。誓願を支えるものは、ニーニョに対して人々が抱いている奇跡の治癒力と懲罰としての病気に関する信仰である。

カトリックの祭司が、「良くない、間違っている。」と言っても、マニのカトリックの人々は女性を主体として、この祝祭を行ってきた。財を大量に消費しながらも、祝祭を共有する主体を諸村落間に保持しつつ、カベサ・デ・コチーノは行われてきているのである。

3 誓願の違犯

マニにおいては、聖像への誓願の違犯に対する懲罰(*castigo*)として病気が引き起こされる以外に、誓願の違犯、呪詛(*maldición*)、ピシャン(*pixan*)などの契機で病気や不幸が起こると考えられている。

1) 誓願の違犯

(1) 結婚の誓願の違犯

二人の握手によって効力を与えられる結婚の誓願は、止むを得ない事由のない限り果たされなければならない。例えば、貧困のために、男子が結婚の費用を賄うことができない時は、女子が男子の家に駆落する形で誓願は果たされる。マニおよびその周辺村落では、駆落は両家族の面前での二人への鞭打ちの制裁を伴うが、最終的には許容されるのが通例である。

結婚の誓願をしておきながら、双方が納得できる理由で破談する場合は、二人の握手でそれを確認し合うのが慣例である。このような手続きをふまない身勝手な行為は、病気によって科罰されると言う。しかも、この場合は妖術(*xpul ya'a*)が深く関わってくる。次に掲げる事例は、マニで特に著名である。

事例1

ミゲルにはローラという恋人がいました。二人は結婚の誓願を立てていました。そのうちに、ミゲルが別の女に恋をしたのです。その当時から、村ではバチャタ(*bachata* 個人の家で行われる音楽抜きのダンスパーティ)が盛んで、ミゲルとローラは連れ立って頻繁に踊りに出かけていたものでした。しかし、ミゲルは新しい恋人と、バチャタに参加するようになりました。

ある日のバチャタで、ローラは新しい恋人と一緒にミゲルに出会いました。ローラは甚だしい憤りと不快を感じ、腰をおろしたまま誰とも踊りませんでした。「ミゲル、私たちの誓願を忘れないで。私は誓願を果たします。もし、あなたが私たちの誓願を果たさないつもりならば、用心した方が良いですよ。ただでは済まないでしょうから。私は誓願を果たします。」とローラは言って、ミゲルと握手しないで別れました。

ミゲルは、その後二度とローラと話をしなくなりました。すると15日ほど経って、彼は働くことができなくなったのです。ミルパに出かけても、座り込んで両手を頬に当てたまま働こうとしなかった。父が怒って、「どうして働かないのだ」と叱責しても働かないのです。ミゲルには熱がありました。妖術の一つの印なのですが。彼はアマカに横たわったまま起き上がることができなくなりました。

医者に診てもらっても、「どこも悪くない。何も処置はできない。」と言われたそうです。家族の者が、カトリックの祭司に相談したのですが、ここでも、「私には何もできない。」と言われたそうです。そこで、ペンテコステに改宗しました。

4年間ずっと病気を患っておりました。その間、何もできないままでした。ある日、「ローラ、私たちの誓願を果たしたい。」と言い出しましたが、それから8日後に死にました。ミゲルの死体の骨の中に、赤い布の切れ端が入っていました。これは妖術の結果であると、村の人たちは知っています。(49歳・男子・既婚)

事例2

グベルトには恋人がいたのですが、オシュクツカブの女に恋をしました。新しい恋人との仲が深まってきたので、「私は或る女が好きになった。あなたとは結婚しない。」と旧い恋人に告白しました。彼女は、「そんなことをしてはいけません。あなたは誓願したではありませんか。」と強く反対しました。彼女の祖母も「あなたは誓願したのだから、この娘と結婚しなければならない。あるいは、誰とも結婚しないのかのどちらかしかない。さもないと、重大な結果を招くことになる。」と戒めたのです。しかし、グベルトは二人の発言に耳を傾けず、ただ笑って済ましておりました。

彼は土曜ごとに新しい恋人を訪れていたのですが、そうするうちに、ぼんやりすることが多くなりました。家でも外でも、返事をしなくなり、反応が鈍くなりました。医者も診断も下りませんでした。ただ、ぼんやりして、道路の石の上に腰をおろして、虚ろな目を向けているだけになりました。新しい恋人も、彼のもとを去って行きました。

父親が死んで、今は母と同居していますが、現在でも誰とも話さないし、何も考えることができません。

グベルトがこのようなになったのは、誓願を果たさなかったからだと言われている。グベルトの状態は妖術のせいと、それを仕掛けたのは、旧い恋人の祖母と考えられています。彼女には、そのような力があるとみんな言っています。(49歳・男子・既婚)

結婚の誓願の違犯が、全て妖術で科罰されるとは断定できない。妖術は厳存するといつつマニの人々はそれについては語らない。この領域に関する細やかな研究は、今後の課題の一つである。

(2) 代親 (*padrino/madrina*) の誓願の違犯

誓願は、儀礼的親子関係 (コンパドラスゴ *compadrazgo*) が成立する場面でも重要な意味をもっている。特に、洗礼の場合はその重要性が強調されている。

洗礼の代親の依頼を断ることは、神に逆らうこと (*ke'ban*) であるので、代親が重複したり他に特別な事情がないかぎり誰も申し出を断らない。洗礼に関しては、代親の依頼を承諾した時点で一つの誓願 (*grande juramento*) が成立する。その後8日目に、七面鳥の授受を介して誓約 (*tzik'ol*) がかためられた時点で、更に大事な一つの誓願 (*muy grande juramento*) が成立すると考えられている。したがって、洗礼の代親に関する誓願の違犯は他の場面よりも深刻な結果をもたらす、違犯者を病気や不幸にすると信じられている。

2) 呪詛 (*maldición*)

呪詛は病因だけでなく、事故や負傷の原因ともなりうる。呪詛には必ず結果するものと、そうとは限らないものがある。前者に属する代表的な呪詛は、ニーニョ・ディオスに関わるものと、母による呪詛である。事例を一つずつ示してみよう。

事例1

これは、今から16年前に、私の義母の家で起こったことです。その家には、33年間義母と一緒に働いてきたお手伝いがおりました。ある日のこと、ニーニョ・ディオスの飾りがなくなっているのに、お手伝いが気づきました。彼女には、それを誰かが盗んだか見当がつかなかったので、紛失物占師の所に行き、「盗人は誰か」と尋ねました。「一人の男が盗んだ。取り戻しましょうか。」が、その女占師の解答だったので、「是非、しかも早急をお願いします。さもないと、私が盗んだと思われまから。」と依頼して帰ってきたのです。

真昼時に、一人の男が義母の家にやって来て、「お許し下さい。私がニーニョの飾りを盗みました。これがそれです。」と白状しました。義母は、「そうだったの、私は知らなかったわ。それはニーニョに戻して下さい。」とだけ答えました。ところが、お手伝いはこう言ったのです。「私は女だが、あんたは男だ。働こうと思えば働けるのに、働きはしないで、ニーニョの飾りを盗んだ。ニーニョの飾りを盗むような手は、失くなってしまえばいいんだ。」これは呪詛です。お手伝いは、その男を呪詛した後、2度平手打ちをくらせました。

1974年のことだったのですが、このことがあって4年後に、その男はサーカスを見物していた時に、ライオンから右手を咬まれてしまいました。やがて、男は病気になって死にました。盗みを働いた右手をライオンに咬まれたのも、また、その後病死したのも、どちらも呪詛のせいだということは皆知っています。事がニーニョに関していたから、他より深刻だったのです。(49歳・男子・

既婚)

事例2

その母親には、3人の娘と2人の息子がいました。貧しい家族でした。息子たちはメリダで勉強し、先生になりました。娘たちは背も高く、美人で、着こなしも立派でした。子供たちは、母と一緒に外出したがりませんでした。背が低く、ぼろを着ている母と一緒に出かけると、恥ずかしさを禁じえなかったのです。

ある時、チュマイエルのフィエスタに出かけたことがありました。子供たちは、チュマイエルには知人は殆どいないので、恥ずかしい思いをすることもないだろうと考えて、家族全員で出かけることにしたのです。ところで、チュマイエルに行ってみると、息子の友人が多数来ていて、姉妹と母親のことを訊ねる者もいました。息子たちは、姉妹を「自分の姉妹だ。」と紹介したにもかかわらず、母親を「自分たちの奉公人 (*xk'os*)」として紹介したのです。

マヤ語では非常に強い侮辱語である *xk'os* という言葉を浴びせられ、母親は屈辱を感じ、その発言をした長女と次男に対し、次のように呪詛しました。「パラシアタ(長女名) エロイ(次男名)、お生憎さまだね。お前たち二人が、仕舞にどうなるか篤と見てなさい。私は、みすばらしく見えるだろうよ、綺麗に着飾ったお前たちとちがって。でも、わたしはお前たちの母親だよ、乳を飲ませ、食物を食わせて、お前たちを育ててきたんだ。それを、事もあろうに奉公人呼ばわりして。この報いは、必ず神がなさるから、仕舞にどうなるかよく見ておきなさい。」

パラシアタは愛人生活を経た後、米国で暮らしています。一人娘は娼婦となって、コスメルに住んでいます。親子離別し、薄幸の人生を送っていますが、これは母親の呪詛のせいだといわれています。

エロイへの呪詛の結果は、妻との離婚、酒飲みとなって身を持ち崩し、乞食まがいの生活を余儀なくされている事実に表されているのです。

母から子への呪詛は、必ず結果すると信じられています。(49歳・男子・既婚)

3) ピシャン (*pixan*)

ピシャンは、各人の持つ靈魂 (*espíritus*) である。全ての人が、ピシャンを持っている。各自のピシャンは、特に就寝中に、本人の住む村のあちこちを歩き廻る。さらに、本人のピシャンは、その人物が知っている他村も徘徊する。死の直後には、ピシャンは当人が生前知っていた場所を訪れる。その後、ピシャンは本人が善人なら天国 (*ka'an*) へ、悪人なら地獄 (*metnal*) へ住く。

死後、誰かのピシャンが徘徊していることは、例えばアマカがひとりで揺れたり、食器がガチャガチャと音を立てたり、容器が引っ繰り返ったり、笑顔や泣き声に酷似した音などの現象で判明すると言う。そうした場合には、ピシャンが何かを請うてもいるのだから、死者の生前の好物を供

物として捧げなければならない。小さなピシャン (*mejen pixan*) は10月31日の朝に、大きなピシャン (*nuccuch pixan*) は11月1日の朝に、天からこの世に帰来し、それぞれ8日後 (*bix*) に再び天へと旅立つ。

ある人のピシャンが、別の人のピシャンに入る場合が起る。

事例1

一人の男が死んで、その人のピシャンが或るオモチャの中に入り、次に、近所に生まれた赤児に入ったことがありました。この子供は言葉を喋り始めると、親とこのような会話をしたそうです。

「ボクの、あのオモチャをちょうだい。」「お前には、そんなオモチャは買ってやってないんだから、オモチャはないよ。」「あるよ、ボクのオモチャはあるよ。」「どこにもないよ。お前のいうオモチャはないよ。」「ここじゃないよ。となりにあるよ。となりの家にあるオモチャ、それボクのだよ」

その子の親が隣家に行って尋ねると、子供が言った場所に、言ったとおりのオモチャが在ったそうです。(49歳・男子・既婚)

事例2

ある日の午後、アマカに座っていた18歳の娘に、男のピシャンが入った。娘は全身が震え出し、その男の母と次のような応答をし始めた。

「どこにいるんだい。」「ラモンにいます。」「なぜ帰らないの。」「仕事が忙しくて。」「帰ってきておくれ。」「帰りましょう。」「いつ?」「明日。」「明日の何時?」「午後にも。」「

ところで、事実、その息子が帰ってきた。「昨日どこにいたんだい。」「ラモンです。」「ラモンで何してた?」「椅子や机を作っていました。」「なぜ、今日帰って来たんだい。」「実は、昨日の午後、昼寝をしていたら、眠っているうちに家に帰らなくてはと思ったのです。」(49歳・男子・既婚)

このような性質を有するピシャンが、病因でもありうることは、治療儀礼において、メンが唱える祈りの内容から考えられることである。しかし、ピシャンを病因とする病気の具体的事例は、現在までのところ、収集できていない。ここでは、ピシャンが病因となりうる可能性を示したにすぎない。

II 聖像と病気治療

カトリック村落マニにおいて聖像との関連で語られる奇跡は、聴取調査によるデータの範囲内に限ると、ヴィルヘンとニーニョ・ディオス(写真 7 8 9 10 参照)とニーニョ・デ・ア

トーチャにやや集中する傾向がある。

写真7 ヴィルヘン グアダルッペ

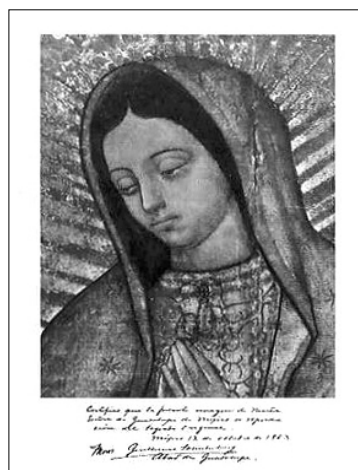


写真8 ヴィルヘン アスンシオン



写真9 ニーニョ ディオス



写真10 病気が治ったことへの御礼状



ヴィルヘンとニーニョとの関連で語られた病気治療の概要は下記のようなものである。病気治療の具体的な内容の全体像を把握するために、聴取調査によって収集した内容を聖像・動機・行動・応答・結果・場所の項目に分類し、概略のみを提示する。(左端の数字はデータの整理番号である)

1 聖母 (virgen)

- ①聖像 どの聖像や神に病気治療を乞うか
- ②動機 病気治療を乞うきっかけとなった事柄
- ③行動 本人がどのような行動をしたか
- ④応答 聖像や神との間で、どのような応答があったか

- ⑤結果 具体的にどのようなことが病気治療との関係で起こったか
- ⑥場所 病気治療を乞う場所はどこであったか

- 7 ①ヴィルヘン・デ・ラ・ルス (Virgen de la luz)
 - ②娘の目が痛み始める
 - 医者の治療も効果がなかった
 - ③卵一個を捧げる
 - ④捧げた卵をヴィルヘンの目にこすりつける
 - ⑤娘の目の病気が快復する
 - ⑥家
- 10 ①アスンシオン (Asunción)
 - ②自分と娘が重病になる
 - 医者の治療も効果がなかった
 - ③一人の婦人から、ローソクと娘の写真一葉をヴィルヘンに捧げて、祈りなさいと教えられたので、ローソクを捧げて祈る
 - ④
 - ⑤娘の重病はたちまち快復する
 - ⑥教会
- 11 ①コンセプション・デ・イサマル (Concepción de Izamal)
 - ②娘の頭痛がなおらない
 - 医者の治療もメンの治療も効果がなかった
 - ③娘が元気になったら、イサマルへ巡礼することを誓約する
 - ④
 - ⑤フィエスタの当日に娘の頭痛が快復した
 - 巡礼をしてヴィルヘンにキスとローソクを捧げる
 - ⑥家
- 17 ①コンセプション・デ・イサマル (Virgen Concepción de Izamal)
 - ②夢で巡礼の誓約が不成就であることに気づかされる
 - イサマルへの巡礼を約束しておきながら、それを果たしていないのではないかと村のお年寄りたちから教えられる
 - 誓約を果たさないと、ヴィルヘンに罰せられると教えられる
 - ③イサマルへの巡礼が実現するように誓願し、懸命に働く
 - ④夢で女性に激励される

- ⑤巡礼が実現する
巡礼の途中で食事に招待されるようにとの願いが果たされる
巡礼で見たヴィルヘンは、夢に出てきた女性の姿とそっくりであったことに驚く
- ⑥家—巡礼
- 23 ①ヴィルヘン・アスンシオン (*Virgen Asunción*)
②人間関係の罫れに巻き込まれる
③祈り
④教会に行くのをやめていたが、夢を見て、アスンシオンに教会に来るように告げられる
また、15日以内に本人を侮辱している当事者が悪行の報いを受けると告げられる
⑤自分を侮辱していた婦人が他の人々に全身を打擲される
⑥教会
- 24 ①ヴィルヘン・グァダルッペ (*Virgen Guadalupe*) ①ヴィルヘン・グァダルッペ (*Virgen Guadalupe*)
②恋人との別れ ②恋人との復縁と結婚の実現を祈願する
③ローソクを捧げる ③ローソクを捧げる
④夢でヴィルヘンに恋人の帰還を告げられる ④
⑤恋人がヴィルヘンを持って帰還する ⑤恋人が帰還し、復縁し結婚する
⑥教会 ⑥教会
- 25 ①ヴィルヘン・グァダルッペ (*Virgen Guadalupe*)
②ヴィルヘングァダルッペからニーニョに請け戻しをしたところ、ヴィルヘンが夢に出てきて、ニーニョへの請け戻しをやめるように告げる
③ヴィルヘンのためにノヴェナリオを行う
④
⑤動物も病気をしないし、生活も順調であり、問題は起こらなくなる
⑥家
- 31 ①ヴィルヘン・コンセプション (*Virgen Concepción*) ①ヴィルヘン・コンセプション (*Virgen Concepción*)
②経済的困難の克服を祈願する ②病気から回復することと、経済的困難の克服を祈願する
③ヴィルヘンのためにノヴェナリオを行う ③ヴィルヘンのためにノヴェナリオを行う
④ ④

- ⑤夫にいい仕事を与えられる ⑤トウモロコシの良い収穫が与えられる
豚を売らなくてすむようになった
- ⑥家 ⑥家
- 34 ①ヴィルヘン・ファティマ (*Virgen Fatima*)
②市場で収穫物がうまく売買できることを祈願する
③祭壇に向かって祈る
④
⑤息子の収穫物が市場で残らず全部売れる
ローソクを買って捧げる
⑥家
- 35 ①ヴィルヘン・アスンシオン (*Virgen Asunción*)
②ヴィルヘンの服を取り去る
③ヴィルヘンが泣く
涙が頬を流れる
④ヴィルヘンに服を着せる
⑤ヴィルヘンは泣かなくなる
⑥教会
- 54 ①ヴィルヘン・アスンシオン (*Virgen Asunción*)
②娘の病気の快復を懇願する
③娘の病気を治して、アスンシオンの祭りに参加させて欲しいと祈る
衣服を一着捧げると誓約する
④夢で、娘の病気の快復を告げられる
⑤翌日から快方に向かい、翌翌日には全快する
⑥家
- 63 ①ヴィルヘン・グァダルッペ (*Virgen Guadalupe*)
②ヴィルヘンとニーニョの位置を変える
③ヴィルヘンが横転する
④ヴィルヘンの位置を元に戻す
⑤ヴィルヘンは横転しなくなった
⑥家
- 64 ①ヴィルヘン・デ・チュイナ (*Virgen de Chuina*)
②貧しいけれども、巡礼の夢が実現するよう懇願する
③
④夢で、ヴィルヘンが本人に会いにくる

- ⑤夢でヴィルヘンに会える
ヴィルヘンを持っている知人の家に行ったら、夢のヴィルヘンと同じであった
- ⑥家—知人の家
- 65 ①ヴィルヘン・アスンシオン (*Virgen Asunción*)
②息子の吹き出物の快復を祈願する
③教会に出かけて祈る
快復したらローソクを捧げると誓約する
④
⑤三日後に息子は泣かなくなって、吹き出物は乾いてくる
何日かすると、根治した
約束のローソクを捧げる
⑥家 教会
- 66 ①ヴィルヘン・コンセプション (*Virgen Concepción*)
②息子の腹の球状の腫れものが治るよう懇願する
医者は手術の必要ありと診断
③隣の家のヴィルヘンに祈る
お金がないので、手術をしないで治してくれるように祈る
病気が治ったら息子とともにイサマルに来て、ローソクを捧げると誓約する
④
⑤手術のための最後の診断を受ける前に、腫れがひいて手術の必要がなくなる
約束のローソクを捧げる
⑥隣の家—巡礼
- 67 ①ヴィルヘン・グァダルッペ (*Virgen Guadalupe*)
②足の指の腫れ、立っておれなくなった
③夢で、ヴィルヘンから、祭壇の向こうに落ちているものを拾えと告げられる
ヴィルヘンの聖像が落ちていたので、それを拾った
④
⑤聖像を拾った日に足の痛みがとれ腫れなくなった
⑥家
- 69 ①ヴィルヘン・デ・オホ (*Virgen del ojo llagado*) (*colevil ya ichi*)
②両目が赤く腫れて激痛が走る
③ヴィルヘンに卵を一個捧げるよう教えられる
ヴィルヘンに卵を一個捧げる
④
- ⑤翌日の明け方には目が痛まなくなり、赤みもとれる
⑥家
- 71 ①ヴィルヘン・アスンシオン (*Virgen de la Asunción*)
②一週間発熱がつづいてよくならなかった
医者もいなければ薬もなかった
③ローソクを捧げて祈る
病気が治ったらローソクを捧げると誓約する
④翌日冷たい空気を感じ悪感がする
⑤悪感がして、眠りから醒めてみると解熱していた
約束のローソクを捧げた
⑥家
- 72 ①グァダルッペ (*Guadalupe*)
②膝の腫れて、歩行不能になる
③ヴィルヘンの祝祭当日に、教会で祈り病気の完治を懇願する
④
⑤教会で歩けるようになる
年々ヴィルヘンのためにロサリオを行う
⑥教会
- 73 ①ヴィルヘン・デ・チュイナ (*Virgen de Chuinah*)
②夫が病気になる
③巡礼をしたいと願っていたが、お金がなくてそれができなかった
裁縫をつづけて少しずつ巡礼の資金をためる
ある家族がトラックに乗せてくれたこともあって、巡礼の夢がかなう
④
⑤夫の病気が全快した
⑥巡礼
- 1 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②夫の永年の放蕩不埒と女性関係の立て直し
③ニーニョの前で祈る
④夢に出てきた一老人の指示に従って、家の裏の木にローソクを灯す
夫の浮気の相手が不幸な目に合うことが予言される
⑤浮気の相手の女性が他人との争いごとにおいて怪我をする
⑥家
- 8 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)

- ②大金を出して買った豚が重病になる
③ニーニョの前に行って祈る
豚が元気になったら、豚を一匹捧げると誓う
④
⑤豚の病気が回復したので、太った方の豚をヴィルヘンに捧げた
⑥家
- 16 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②妊娠と安産を祈願する
③ノヴェナリオをし、出産のときも祈りを欠かさなかった
④
⑤18時間の初産が成功する
⑥家
- 52 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②妊娠とお産の成功を祈願する
③1月10日にニーニョ・デ・アトーチャを祝うので、その前にお産をしたいと願う
④
⑤1月10日前にお産をする
ニーニョのお祝いをした
⑥家
- 55 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②病気の快復を懇願する
③ローソクを捧げて祈る
奇跡が起こったらローソクを捧げると誓約する
④夢で、病気の快復を告げられる
⑤
⑥家
- 56 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②息子の病気を治して欲しいと懇願する
医者の治療も効果がなかった
③跪いて祈り、成功したらノヴェナリオを行うと誓約する
④
⑤9日目に息子が元気になる
⑥家
- 57 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
- ②息子の病気の快復を懇願する
③薬草を捧げて祈る
薬草を食べたり、患部に塗ったりする
④
⑤息子が歩けるようになった
⑥家
- 58 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②パルセーラの収穫と収穫物の売買成功を懇願する
③ローソクを捧げて祈る
④
⑤懇願するように奇跡を起こしてくれる
ローソクを捧げる
⑥家
- 59 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②病気治療の能力が十全に発揮できるよう懇願する
③薬草を用意し、火の中に入れて、アトーチャに祈る
ローソクを捧げると誓約する
④
⑤翌日、病人が元気になった
ローソクを捧げる
⑥家
- 60 ①サント・ニーニョ・デ・アトーチャ (*Santo Niño de Atocha*)
②兄の酒飲みが治るよう懇願する
③ニーニョのためにノヴェナリオを行う
④
⑤太った七面鳥を一羽携えて、兄が戻ってくる
七面鳥をニーニョに捧げる
⑥家
- 68 ①ニーニョ・デ・アトーチャ (*Niño de Atocha*)
②飼っていた豚を犬が襲い瀕死の状態にする
③祈りをささげ、豚が元気になったらロサリオを行い、豚の肉を捧げると誓う
④
⑤瀕死の豚が元気回復する
約束の豚を捧げてロサリオを行なった

⑥家

2 幼子イエス (*Niño Dios* ニーニョ・ディオス)22 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②化粧品の買い物が成功することを祈願する

③ローソクを灯して、祈る

④

⑤買い物が成功する

⑥家

26 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②鹿狩りの成功を祈願する

③ノヴェナリオと祈りを行う

④

⑤鹿を射止めることができた

鹿の頭をニーニョに捧げた

⑥家

28 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②道を照らして、鹿狩りを成功に導くよう祈願する

③ノヴェナリオと祈りを行う

④

⑤鹿を射止める

鹿の頭をニーニョに捧げて、参加者の間で分け合う

⑥家

29 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②ニーニョを手放したことへの科罰として、鹿ではなく人を撃ってしまう

③猟で人を撃ってしまい、そのために多大な出費をしなければならない

④

⑤ニーニョを買い戻す

その後、不運は降り懸からない

⑥家

38 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②収穫の祈願をする

③ノヴェナリオを行う

④

⑤他の兄弟よりも沢山の収穫があった

⑥家

39 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②ニーニョを侮辱する

③顔と首がまわらなくなった

ニーニョに膝まづいて許しを請う

④

⑤顔が元にもどる

⑥家

44 ①ニーニョ・ディオス (*Niño Dios*)

②印をつけた一番大きな七面鳥が行方不明になる

③七面鳥が戻ってくるように祈願する

④

⑤山の中の洞窟で問題の七面鳥を発見

七面鳥を殺して、分配しあった

⑥家

カトリック村落マニでは、このような病気治療の事例を聞き知るのに少しも困難を覚えない。マニの教会や家内祭壇の聖像は、それらへの信仰を抱くものに病気を投げつける存在であると同時に、このような病気治療の奇跡を起こし、人々を困難から救い出す存在でもある。

ヴィルヘンとの関連で語られた病気治療は、次のように、22事例である。

ヴィルヘン・デ・ラ・ルス	眼病
アスンシオン	重病・泣く・病気・吹き出物・人間関係・発熱
コンセプション・デ・イサマル	頭痛・巡礼・経済的困難・病気・腫れ物
グァダルッペ	横転・恋愛・請け戻し・足痛
ヴィルヘン・デ・チュイナ	巡礼・病気
ヴィルヘン・ファティマ	収穫物
ヴィルヘン・デ・オホ	眼病

アスンシオンとコンセプション・デ・イサマルとグァダルッペに関連するものが比較的多い。内容的には、病気からの立ち直りに関係する事例が約半数をしめている。また、人間関係や経済的困難からの立ち直りと、収穫物や巡礼の成功を少数含んでいる。

ニーニョ・デ・アトーチャは、女性関係、豚の病気(2事例)、妊娠・安産(2事例)、病気(3事例)、収穫、病気治療の能力、飲酒との関連で登場する。ニーニョ・ディオスに関しては、買い

物、鹿狩り(2事例)、科罰(2事例)、収穫、行方不明に関して奇跡が語られている。

このように、マニの教会や家内祭壇の聖像は、それらへの信仰を抱くものに病気を投げつける存在であると同時に、かれらの病気を癒す存在でもある。自分の病気だけでなく、自分以外の者の病気も、ヴィルヘンやニーニョに頼めば治してくれるのである。病気の治癒だけでなく、作物の豊作、結縁、妊娠、家畜家禽の順調な成長などが、聖像による奇跡として解釈され信じられてきた。また、聖像との関連で語られる奇跡は、ヴィルヘンとニーニョ・ディオスとニーニョ・デ・アトーチャに集中する傾向がある。

おわりに

カトリック村落マニには、既に取り出したように、神の懲罰(*castigo*)の結果としての病気という考え方が存在している。誓願(*promesa : juramento*)を果たさなかった人や、悪行を働く人への懲罰として、神は人間を病気にする。苦難としての病気の観念は、現象としては人物、家畜家禽、作物、大地の不調不振として現れる。

マニで病因を解明し、病気を治すことができるのは神と聖像とメン(*Men* 呪医=祭司)である。教会の神と聖像、また教会の神とは異なると意識されているその他の神々は病気を投げつける存在であると同時に、病気を治癒させる存在でもある。そしてマニの人々によって奇跡的としてとらえられる事象を最も多く含むのは、神や聖像やメンによる病気治療の領域である。神や聖像やメンによって病気が治癒させられる過程や治癒した結果が、マニでは奇跡的な事象として語られる。聖像による奇跡の治癒力と、聖像の懲罰としての病気をめぐる信仰は、聖像のための祝祭を存続させてきている重要な要素である。聖像をめぐろうとした思考と態度は、マニおよびその周辺村落を越えた広域で展開している。

マニのカトリックの人々の聖像による奇跡への信仰は、マニおよびその周辺村落内だけに止まらず、ティシミン(Tizimin 三賢王)、イサマル(Izamal ヴィルヘン・マリア)、チュマイエル(Chumayel キリスト)を中心として、ユカタン半島の諸地域を含めた広域において展開している。病気の治癒だけでなく、作物の豊作、結縁、妊娠、家畜家禽の順調な成長などが、聖像による奇跡として解釈され信じられてきた。

一方、三賢王、ヴィルヘン・マリア、キリストへの誓願への違犯が、病気や不振や不運の動因と説明される。したがって、マニの人々は一旦チュマイエルに行くと言って誓ったならば、とうもろこしを5メカテ(*mecate* 20㎡)余分に作ったり、家禽を売ってでもチュマイエルに出かける。イサマルのヴィルヘンに捧げ物をすると誓ったならば、到達するのに困難な高い遺跡(*k'nic k'akamo* ヴィルヘンが発見された場所)への道程でも、決して途中で引き返したりはしない。そのような断念は、ヴィルヘンへの嘘であり、早晚早死にか転倒が本人に科罰される。三賢王に誓願を立てるということは、常に'*tres reyes*'と呼びかけ他の呼称を使用せず、供物(ろうそく、小旗、パニ

ュエロ、ロザリオ、衣服、牛、闘牛用の銜など)も三賢王に均等割りするなかで行われるべきとされる。この誓願の立て方への違犯も当人に妊娠や豊作をもたらさないだけでなく、違犯者を負傷、病気、死へと陥れると信じられている。

このように宗教は文化複合として存在している。宗教は単に教義にあるのではなく、文化の基底にあり、集団に分有され、具体的な生活として存在しているのである。したがって、宗教を理解するためには、宗教を共有する人たちの間で何が分有されているのか、何がどのように分有されているのか、を時間感覚、空間感覚、心的過程、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、宗教現象の科学的解明を試みる必要がある。宗教は現実には宗教的文化統合として存在する。この意味で宗教の理解は深さを要求するのである。

この視点に立ってメキシコユカタン州マニにおける宗教的文化統合を調査研究する場面では、マヤ的な要素とカトリック的要素の複合が人々にどのように分有されているかに注意することが重要である。

注

¹ シゲリスト 1973年『文明と病気(上・下)』岩波新書 下巻 1-24頁

² 山形孝夫 1976年「治癒神イエスの登場」『思想』5月号 70-89頁 を参照

³ シゲリスト 前掲書 p.13 山形孝夫 前掲論文 pp.82-84 参照

⁴ 山形孝夫 前掲論文 pp.72-77 参照

⁵ シゲリスト 前掲書 pp.14-16 参照

⁶ 山形孝夫 前掲論文 pp.77-79 参照

⁷ シゲリスト 前掲書 pp.14-18 参照

⁸ シゲリスト 前掲書 pp.14-18 参照

山形孝夫 前掲論文 pp.70-71 参照

⁹ 山形孝夫 前掲論文 p.71 参照

¹⁰ シゲリスト 前掲書 p.17 参照

¹¹ シゲリスト 前掲書 pp.17-18 参照

¹² シゲリスト 前掲書 pp.18-19 参照

¹³ Riese F.J. 1981 *Indianische Landrechte in Yukatan um die Mitte des 16. Jahrhunderts.* Hamburg. S.168

¹⁴ 拙論 1987年「ユカタンの一村落マニにおけるメン(呪医=祭司)と雨乞いの儀礼(*ch'ach'ac*)について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究(IV)』1985年度 メキシコ海外学術調査報告 研究代表者 野村暢清 pp.34-377

筆者は、1983年以来取り組んできているマヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける調査

研究を、『メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究』（日本語）ならびに *A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico*（英語）と題して再考と集大成を行っている。本稿は、その一部をなすものであるために、内容の一部が既に公表（論文および学術大会での口頭発表）したものと重複する部分があること、また、その部分については、引用参考文献に明示することによって責任の所在を明らかにしていること、を予めお断りしておきたい。

- ¹⁵ 拙論 1996年 「マヤユカテカの一村落マニにおける奇跡について（1）—メンの病気治療の事例を中心に—」『久留米大学比較文化研究所紀要』第17輯 pp. 11-152
- ¹⁶ 拙論 2007 「宗教の太古性と残存性に関する一考察—マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第1号 pp. 195-232
- ¹⁷ *saka'p*はトウモロコシの粒を石灰を入れずに煮た後、粉にし、それを鉄板の上で焦げない程度に焼き、少量の水を加えて柔らかくし、ボール状にしておいたものを水に溶いたものである。マヤの伝統的な食べ物の一つである。儀礼としてのサカップは、四方と中心に置かれた器 (*luchu* マヤの植物から作った容器) にサカップを入れて、祈り、シップチェ (*shibche*) の葉でサカップを少量ずつすくって四方に撒く行為である。
- 詳細は、拙論 1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞の儀礼 (*cha'chac*) について」 pp. 238-242 『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究 (IV)』 pp. 225-254 を参照。

引用・参考文献

中別府 温和

- 1985年 「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」二分法とメン（呪医＝祭司について）」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅲ）』 pp. 339-377
- 1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞いの儀礼 (*ch'ach'ac*) について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅳ）』 pp. 225-254
- 1989年 「マニにおけるメン（呪医＝祭司）と儀礼慣習と擬制的親子関係 (*padrinazgo-compadrazgo*)」『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』 pp. 129-150
- 1991年 「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」『比較文化研究』10輯 pp. 91-123
- 1993年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について—駆け落ち婚 (*pudz*) の事例を

- 中心に一」『比較文化研究』15輯 pp. 123-149
- 1995年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」『地域総合研究』5号 pp. 53-64
- 『マヤ・ユカテカの一村落マニにおける奇跡について（1）—メンの病気治療の事例を中心に—』『比較文化研究』17輯 pp. 111-152

Harukazu NAKABEPPU

- 1996 *The Structure and Function of Ritual Kinship in a Maya Yucatecan Catholic Community, MANI.*
Bulletin of the Center for Regional Studies. Vol.6 pp.77-96

Riese F.J.,

- 1981 *Indianische Landrechte in Yukatan um die Mitte des 16. Jahrhunderts.* Hamburg.

Thompson R.A.,

- 1974 *Aires de Progreso: Cambio Social en un Pueblo Maya de Yucatan.* INI.Mexico.

シゲリスト

- 1973年 『文明と病気（上・下）』岩波新書 下巻 1-24頁

山形孝夫

- 1976年 「治癒神イエスの登場」『思想』5月号 70-89頁

